

Karma-prajñapti (『業施設』) 解説

宮崎啓作

西藏大藏経阿毘達磨部 No. 5589 Las gDags-pa は舍衛城祇園での十不善業の仏説に始まる。第一章奥書には、大阿毘達磨論 (BStan-bCos Chen-po Chos-mkhan-pa) より諸業を区別して説いたといわれる。その大阿毘達磨論は現存の藏中には見い出せないが、『法蘊足論』や『集異門足論』に部分的に一致し、uddana で始まる十一章の中でほぼ基礎的な業論が知れる。意業には無表業を立てない有部教義がこの『業施設』ではまた確立していない。

〔意業〕の食欲と瞋と邪見は表と名づけるか、或いは無表と名づけるか。謂く表でもなく無表でもなく。T(p)115-94:27~3-1

第一章

uddana に曰く、作思過去善所縁欲界

十不善業の仏説を教証として、作^①・二思業^{②③④}・過未現の思業^⑤・善不善無記の思業^⑥・三性の思業の所縁^⑦・三界の区別^⑧・一因^⑨十二因による業の区別へ展開する。

(1) 作は思業 (sems-pahi las) と思所起業 (bsams-pahi las) の二つである。

(2) 思業は思、現前思 (amnon-par-sems-pa) 已思 (sems-par-gyur-pa) 思と関係する。心が造作する、意業であるところのもの。

(3) 思所起業は思所起の身業と思所起の語業である。

身体的運動や言語活動は思より起こることに注目した。思業思所起業は『中阿含27 達梵行経』に所説される。しかしA.N.VI.63にはない。『法蘊足論11』には(2)に等思・当思・思性が加わる。(3)には譬喩者の三業一思説や、『大毘婆沙113』の身語意業を他処・自処・相応処とする説は見られない。

(4) 思業の過去は思を生じた…生起した…成した…尽した、滅した、離れた、変じた、去った…。思業の未来は思を未だ生ぜず…生起せず…達せず…来らず…。思業の現在に思を生じ…生起し…達し…住し、変ぜず現在と広く関係のあるもの。

(5) 善の思業 (T(p)115-87:21~3-7) は①無貪・無瞋・無痴によつて法に随い〔考察し〕六根を六境に働らかせ心を造作する意業である。②撰受せずに四静慮と四無色界を修習する心を造作する意業である。③殺生・不与取・欲邪行・虚誑語・離間語・麁惡語・雜穢語・食欲・瞋恚から離れ正見を具す作意と相応する心を造作する意業である。④無忿・無恨・無覆・無惱・無嫉・無慳・無諂・無誑・慚・愧を具す作意と相応する心を造作する意業である。⑤挨拶し敬礼し起立し合掌し跪こうとする作意と相応する心を造作する意業である。⑥布施して福を行じ布薩に住し戒を受けて坐し淨心によつて自ら清めようと〔作意する〕心を造作する意業である。⑦善の作意により苦を苦と作意し、集を集と、滅を滅と、道を道と作意する心を造作する意業である。

不善の思業 (T(p)115-87:3-7~4-8) は①②④の反対で⑧貪・瞋痴により非法に随い、〔法に随つて〕觀察せず。⑨殺生…邪見を具す。⑩忿恨・覆…無慚・無愧を具して作意する。⑪腕や拳や手で打ち、枝や鞭で傷つけようと作意する意業。⑫不善の結・縛・

随眠随煩惱・諸纏と相応する心を造作する意業である。

無記の思業 T(p)115・87・4・8～5・6) ⑬善心でもなく煩惱をもった心でもなく、自然に住した道を行じ六根を六境〔に働かせ〕心を造作する意業である。⑭授受する心により四静慮と四無色を修習する心を造作する意業である。⑮無記の結・縛：諸纏と相応する心を造作する意業である。

以上は不知難見の意業を具体的行為で示し⑩に橋・害を加えれば十小煩惱地となり⑬⑭では煩惱の異名も確立してゐる。

(7)業を三界に区別する。(T(p)115・87・5・6～90・2・3)

欲界 ①～⑦、⑧～⑫、⑬～⑮
色界 ①②⑥⑦、⑬～⑮
無色界 ①②④、⑬～⑮

(6)善思・不善思・無記思が所縁とする善・不善無記は①善思が善を所縁とする。…⑫無記の思が善・不善・無記を所縁とする。(T(p)115・87・5・6～90・2・3) ①善の身業・口業・心と心所生法と善心不相応行法は因をもつて生じる果となる異熟をもつと作意する。或いは善士・辟支仏・仏の声聞・諸行者・諸善士に讃嘆保護されてゐる時、自・他・共者を害せず、慧を生じ、「所対治」と能対治と随順して涅槃をなそうと〔諸法に利益があるよう〕作意する。不善思は無因無果を作意する。

(8)業の区別 (T(p)115・91・5・3～92・2・2)

①業②思業・思所起業③身・語・意業④欲・色・無色・不相応〔業〕⑤見所断記・無記、修所断記・無記、非所断業⑥苦見所断・集・滅・道、修所断、非所断：⑩「十因で諸業を撰す」であるが身・口・意・それぞれ善有漏・不善有漏・無記有漏・無漏の無漏十

一因で示される。

第二章

不善業の原因である貪・瞋・痴の三根本を説く。『集異門足論 4、三不善根』と関連し、又『法蘊足論 9』にも見られる。貪の同義語十六挙げの中、「防護」(玄奘訳)は強い執着 (kun-tu-shen-pa) である。国訳者の「苦の集・貪の類」「苦集貪の類」は西蔵訳の「苦と集に貪る」がよい。瞋の同義語十二のうち玄奘訳「過患」は憤恚 (sdaṅ-ba) である。『集異門足論 4』の国訳も、「損害を為さんと欲する内に、裁杭を懐く」は「損害を為さんと欲し、内に裁杭を懐く。」と説いた方がよい。痴の説明中、『集異門足論 3』と『法蘊足論 9』は無明と無眼と訳を異にしているが、『業施設』は無眼とする。三十四無知は『業施設』では三宝、四聖諦、善不善法、応不応修法、有敵対法の十二無知が欠落する。T(p)115・88・1・4; 2・2 に見られる vipakṣa prātipaksika virodha ṅ jñāmitra & Ye-ses sde の訳を補足し、śes-rab (ṅgags-par-ḡgyur-ba) dan mi-mthun-pa hphyogs] dan phoṅs-paḡi (or gñen-poḡi) pḡyogs-dan-mthun-pa (ma yin-pa) dan myaṅ-an-las-ḡdaha-bar [mi] ḡgyur-ba dan 「慧〔を滅〕て、能対治と所対治が相〔違〕して、涅槃〔せず〕とする必要があろう。従つて玄奘訳「障礙善品」は「善品を障礙して」と国訳せず「障と善品と礙して」の方がよい。又玄奘訳「発劣慧」(『法蘊足論 9』)より「滅勝慧」(『集異門足論 3』)がよい。『国訳一切経集異門足論 3 卷 68 頁注 17』で「彼(善)品」を「智慧の準備 資糧」と説明するが、それは能対治の智慧そのものの即ち prātipa-saḡhana である。(大谷大学大学院修了)